ちょっとそこまで ～お散歩日和（名言編）～

あらたふと青葉若葉の日の光… 芭蕉

あらたふと青葉若葉の日の光　（芭蕉）

若葉の季節が過ぎ、気が付けば木々の葉は少しずつ色を濃くして、青葉となって茂ってきました。日差しも強くなり、少し歩けば汗ばむくらいですが、青葉を抜けてくる風は爽やかです。

すっかり青葉になる前の、若葉が入り混じった状態を「青葉若葉」と言います。巻頭の句は、芭蕉が奥の細道の旅で、日光の東照宮を参詣した折に詠んだのだとか。ほんのわずかな変化も見逃さずに、その美しさを言葉に言い留める、しかも、太陽の光と日光の地名とを上手に掛け合わせているところなど、なかなか真似のできない言語感覚です。

さらに言えば、冒頭の「あらたふと」とは「あら、尊いわ」の意味ですが、これもまた普通はこんな言い方しません。ただただその感性の豊かさに圧倒されるばかりです。

先日、ＮＨＫでスポーツニュースを見ていたら、江夏豊の語る野村ノートのことが紹介されていました。そこで、何度も江夏の口から語られた言葉がやはり「感性」でした。改めて感性とは何かと問われるとつらいのですが、鍛えられた直感と言った方が分かりやすいのかもしれません。

そこで思い出したのが、「未来のルーシー」（中沢新一・山際寿一著）です。

まず、タイトルの「ルーシー」は、３２０万年前に生きていたアファール猿人の化石に名付けられた名前だそうです。しかも、発掘時に、ビートルズの「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ」が流れていたことから名付けられたとのエピソードは愉快でした。

その後、人類の進化、交換の思想、ＡＩ、現代数学、相対性理論と量子力学、芸術と宗教、そして言語の誕生、ゴリラ学に、レンマ学と…、この２人の話題は、あまりにも守備範囲が広過ぎて、話に付いていくのがやっとでした。

その中で、長年の疑問の端っこが少しだけ紐解けてきたのが縄文人についてです。例えば、三内丸山遺跡には、大型竪穴住居が１０棟以上、約７８０軒にもおよぶ住居跡、さらに祭祀用に使われたと思われる大型掘立柱建物が存在したとされていて、従来の採集狩猟生活という範疇では捉えられない文化と社会水準の高さを感じていました。

では、何がそれほど多くの住民を呼び寄せる力になっていたのでしょうか。稲作文化には、農耕生活を成立させるために共同体を構成しなくてはいけなかったという説明がなされ、それなりの説得力を持っていますが、では、この縄文人たちをこれほどまでの多人数集落にさせた、または人々を引き付けたものは何だったのか、説得力のある話にこれまで触れたことがありませんでした。

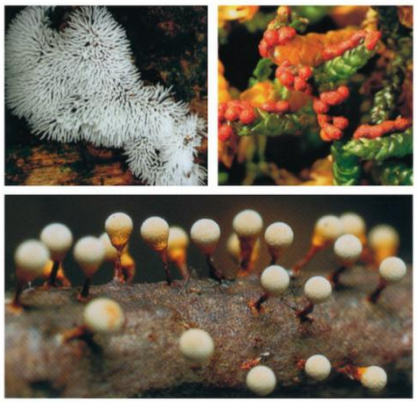
その辺りの思考法として、少なくとも縄文人は、明らかに意識して稲作文化を受け入れることを拒否している節があるとの話は、非常に興味深かったです。自然とともに生きることを積極的に選択しているのですから、現代人は大いに学ぶ点があるはずなのです。

もう１つは、資本主義が壁に突き当たっていることは誰もが認める事実ですが、それを打破する新たな考え方の糸口を見せてもらったことです。それが、中沢新一氏の「レンマ学」なるものです。この本で初めて

知った未知の学問分野でした。

よく分からないなりに解釈すると、古代ギリシャでは理性には２つの意味が同時に含まれていて、１つが「ロゴス的知性」の働き、つまり「事物を取りまとめて言説する」能力。もう１つが「直観によって全体を丸ごと把握し表現する」という意味で「レンマ的知性」と呼ばれるもの。本来はこのロゴスとレンマの２つが共存していたそうですが、いつの間にかレンマの方は忘れ去られ、ロゴス的知性のみ発達を遂げ、その究極的な形態がＡＩとして現在に至っているという主張です。

この考え方の発端が、南方熊楠の粘菌研究だと言います。中枢神経を持たない粘菌は細胞全体のネットワークを用いて摂食の効率を最適化する計算をしている不思議な生物です。これまで、何事も論理的であるべきだと考えられていた世界観が、この粘菌を筆頭にして、無分別、非時間、非線形、非局所を基本とした考え方に移行することで、新たな視点を通して、これまで見落としていたものを見出せるのではないかという提案だと思いながら、読み進めていきました。



←粘菌

ここに至って、次の言葉を思い出しました。

自分というものは良い言葉である。
ある物が独自に存在すると同時に、
また全体の部分として存在する。
自分の「自」の方は、「独自」に存在する。
自分の「分」の方は、「全体の部分」である。
この円満無碍なる一致を表現して「自分」という。

（「安岡正篤一日一言」より）

安岡正篤という人は、哲学者なのか教育者なのかよく分かりませんが、太平洋戦争を終わらせた「終戦詔書」に最後の赤を入れた人として、または、「平成」という元号名を提案した人として有名です。

彼は多くの名言を残している人ですが、私の一番のお気に入りが、この「自分」という詩？です。「ある物が独自に存在すると同時に、また全体の部分として存在する。」とは、数学で言うフラクタル構造と通じるものがあるようにも思います。または、ディズニー・アニメでよく知られた「ベイマックス」に出てくるマイクロボットの姿の方が、私のイメージに近いように思います。いずれにしても、この「全体であると同時に部分でもある」という発想は大事にしなくてはいけない考え方、または発想法だと思います。

例えば、学級担任は子供たちを一人一人を一個の全体として見なくてはいけないことは自明ですが、同時に、クラスを構成する部分としても見ていかなくてはいけません。さらに言えば、彼らは地域社会を構成する部分であり、地域社会は国を構成する部分であり、国は人類社会を構成する部分であり、人類社会は地球生態系を構成する部分であり、その地球は宇宙を構成する部分であり…というように続いてもいきます。

つまるところ、誰もが、いや何であろうと「より大きな全体」を構成する部分であるということです。

したがって、私たちはそれぞれの独自性を保ちながらも全体の秩序を保つ働きをきちんと果たすことを常に意識すべきなのです。そのことを、かつて公害で強く認識したはずなのに、再び地球温暖化で同じ間違いをしていますし、コロナを巡る感染症対策もしかりです。理屈っぽい言い方に聞こえたかもしれませんが、「自分のことだけを考えるな。周りのことも考えろ。」とは常々いろいろな場面で日常的に繰り返されている判断基準に他なりません。

そう言えば、先日、新設の高齢者福祉施設を見学させてもらう機会を得ました。この４月にオープンしたばかりで、まだ入居者も満室ではないとのことで、閑散とした雰囲気が漂っていました。

ところで、その際話題になったことですが、月額２０万円の負担で入居できることや、とりわけ特別養護施設に関しては、さらに入居に当たって所得格差が大幅に是正されている実態を知り、非常に驚きました。

もっと厳しい現実、金持ち優遇を予想していたので、こういう税金の使われ方が、ごく一部でもなされていることはとても意外でした。全体と部分がうまく共栄している事例と言えそうです。

と言いつつ、仏経済学者ピケティの動画作品「２１世紀の資本」をご覧になった方はご存知だと思いますが、欧米を中心に所得による階級格差が猛烈に浸透しています。

そこで紹介された、お金を稼いだ人の心理を探る実験のことを思い出しました。使うのは駒を進めながら財産を増やすゲームです。コインを投げて選ばれた金持ち役は、貧乏人役よりはるかに好条件でプレーできるという点がミソです。

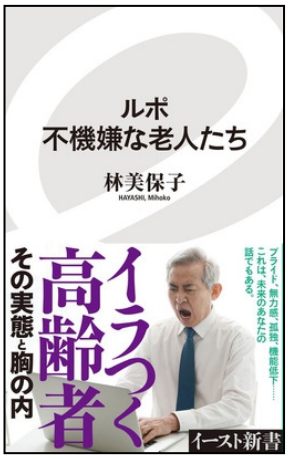
すると、一貫した傾向が表れます。金持ちは声が大きくなり、自分の成功を誇りたがるというものです。単なるツキに過ぎないのに勝因は自分の力だと答えるのです。笑ってしまいますが、そうかもと感じました。このことから、人は、金を稼いだ体験を自らの優秀さと解釈することが見えてきます。こうした心理が背景にあるからなのでしょう。世間は彼らのことを「セレブ」と呼びます。特にマスコミがあおっている印象がありますが、とても滑稽です。

いずれにしても、富める人はさらに富み、逆に、貧しい人はますます貧しさを抜け出すのが困難になっていくという現実を、私たちは生きていることになります。

そういう意味で、今回の施設訪問をしながら、そういうのは良くないことだよ、と小さなこぶしを振るっているような気分になれたのは幸いでした。しかし、日本では、世代間格差の進行が止まらないようです。若者はもっと怒るべきですが、どうしたものか、異常におとなしく、実に不思議です。

高齢者問題からの連想で、最近読んだ「ルポ不機嫌な老人たち」（林美保子著）を紹介しておきましょう。

次々に出てくる「キレる老人たち」の話題は笑いの連続でした。ホテルを出禁になった男性や旅行ツアーの主催者、病院や図書館で怒鳴り散らす老人たち、ドアが開かずに怒鳴った教授風の男性など、多かれ少なかれ目にしたことがある風景ばかりが登場してきます。



そこに共通するのは、いずれもそれなりに高い地位にあったであろう、高齢者の特権意識の強さです。確かに、この世代の人たちは年功序列という日本特有の雇用制度に組み込まれてきただけではなく、家庭、学校の部活などあらゆるところで上下関係の厳しい社会で生きてきて、上意下達の感覚が体に染み込んでいることが大きな原因だろうと解説されていました。

その通りだと思いつつ、私個人は次の分析の方がしっくりきました。以下、引用します。

老年心理学に詳しい臨床心理士に話を聞くことができた。

「高齢者は日々たくさんの喪失と向き合わなければならないのです。定年になって仕事を失ったり、家族を病気で失ったり、計算が遅くなったり、耳が聞こえなくなったり、物忘れが始まったりして、昨日できたことができなくなることが増えてきます。それは、やっぱり、心理的にきついことだと思います。神様でも仏様でもないので、やっぱり失っていくものに執着したり、失っていないと思いたいという心理的に防衛する気持ちにもなるのです。そんな受け入れ難い自身の老いを、時に怒りとして他者に向けて出してしまうことがあります。」

男性は社会的な立場もあり、落ち込んだり、泣いたりするという感情を表に出しづらい傾向がある。

「そうした中でも、表に出しやすい感情が“怒り”だと思うのです。もちろん、他の人には不快な思いをさせてしまいますけれども、男性はそこで、悲しいとか、つらいとか、情けないとか複雑な感情があって、落ち込む代わりに怒りという形で現れることが比較的多いのかなと思いますね。」

最近やたらと怒ることが多くなったと思うのですが、その原因が明確になったと思いました。喪失感です。間違いありません。（終）